

ロータリーの追続けるもの

—米山梅吉の夢は—

2590地区研修リーダー 中山 義之 (横浜南)





1994～1995年度ガバナー
中山 義之 (横浜南)

1. 米山梅吉をロータリーに傾注させたもの

米山梅吉とロータリーの出会いは大正7年のことです。大正6年(1917年)10月15日に、三井銀行常務取締役であった米山梅吉は、日本政府が派遣した目賀田種太郎男爵を団長とする財政問題調査団に、特派財政経済委員として渡米された。公務を済まされてから米山梅吉は、一行と別れ米国の信託会社の調査を行ない、翌大正7年の正月を温暖の地テキサス州ダラスで迎えました。ここで1914年以来ダラスロータリー・クラブ会員であった三井物産のダラス支店長福島喜三次から、始めてロータリーの話聞き、ダラスロータリー・クラブの例会へも出席し、非常に共感を覚えて帰国されたのでした。

米山梅吉がロータリーに興味を持つに至った経緯について、別の記載があります。

大正6年10月渡米された米山先生は、この年ロータリーの大会が英国のエジンバラで開かれ、それに参加する米国会員1,000名以上のために、大汽船を二艘やとった、と聞いて、先生はロータリー・クラブに注目し、三井物産支店長福島喜三次に調査を依頼し帰朝された。これによりロータリーの趣旨が明らかになり、大正9年に東京ロータリー・クラブが創立された。

この記述によりますと、米山梅吉がロータリーに注目

したのは、米国のロータリアンが大型客船二隻をやとってまでして、英国で開かれるロータリーの大会に出席するというロータリーの魅力はどこにあるのかに注目し、それを福島に調査してもらい、その報告を受けてロータリーの趣旨を理解したということになります。

この記述は誤りではないかと私は思います。何故かと申しますと、スコットランドのエジンバラでロータリー国際大会が開かれたのは、1921年6月のことです。この大会は米国以外の国で開かれた最初の国際大会で、国際ロータリーにとって極めて意義ある大会であったのです。また、この年こそ東京ロータリー・クラブが、ロータリー・クラブ国際連合会で認証された年であります。ですから、米山梅吉がロータリーに大きな関心を寄せたきっかけは、福島喜三次から聞いたロータリー運動の内容にあったと考えるべきであります。

それでは、ロータリー運動のなかで米山梅吉の心を動かしたものは何であったか。

米山梅吉自身の職業人としてのサービスという理念に通ずるものを発見されたのではないか。米山梅吉はかねがねビジネスマンのモラルに深い関心を持っていたので、ロータリー・クラブがビジネスマンの集りで、いろいろ奉仕しているところに強く心ひかれたと考えられます。また、ロータリー・クラブは単なる社交クラブではなく、

「ロータリー哲学」を根底におく奉仕クラブであるという点に共感を覚えたのでありましょう。

ポール・ハリスがロータリー・クラブを作ろうとした基本となる構想は、自分が生活しているところには、さまざまな職業を持つ人びと、つまり役割を担った人びとがおり、その人びとはその役割を果すと同時に、自分の生活を支え、友情によって結ばれているそれぞれ異なった職業を通じての奉仕が、そのまま地域社会への奉仕であり、その集りが生活を守り、職業の意義を発展させ、よりよい社会が作られるというものでした。

一つにはビジネスを大事にしようということ、もう一つはフェローシップを大切にしよう、これがロータリー・クラブの最初の夢でした。

ロータリーが創立して2年して、ポール・ハリスはクラブ会長になった時、ロータリーに描いた三つのビジョンを示しました。第一はシカゴクラブの会員増強、第二はシカゴと同じような大都市にロータリーを創ること、第三は自分たちが生活している場所のためにサービスしようということです。

この頃ポールの心の中には、「サービス」を、奉仕行事を遂行するという事業としての概念でとらえていたのではなく、若い人たちと一緒に自分の住む地域を良くするための努力と具体的行動としてとらえていたのではな

いか、今井鎮雄元理事は、こう考察しています。

ロータリーにおける奉仕の理念を明確に表現したシェルドンの“*He profits most who serves best*”というモットーが発表されたのは1911年になってからです。

1914年の第一次世界大戦の勃発とその大戦中のロータリアンの体験は、国境を越えた「奉仕活動」が戦争防止と国際親善のために有意義なものであるという発見でした。「国際奉仕」の概念として明確にロータリアンの意識に上ったのは、大戦の終了した翌年1918年ソールトレイク・シティで開かれたロータリーの国際大会でした。その後、ロータリーの綱領の中に国際奉仕に関する部分を正式に組み入れるべきであると決議されたのが1921年スコットランドのエジンバラで開かれた国際大会においてでした。

ロータリーについて、国際奉仕の概念はまだはっきりはしていない時ながら、以上のような説明を、米山梅吉は、福島喜三次から受けたのではないでしょう。

日頃から「他人の楽しむのを見ているほど幸福なことはない」と言っていた米山梅吉が、ロータリーの奉仕の心、換言すれば、「他人より与えられたいと欲するすべてを他人に与えなさい」、「思いやりの心」を理念とするロータリーを通して、自身の日頃の信念を実践できると信じたのでしょう。少し後のことになりますが、ロータ

リーに横溢する粉飾のない国際親善の精神、とくに各国民間の相互理解の精神に深くひきつけられたのでしょう。

米山梅吉が昭和11年に著した「常識関門」の中に次の一節があります。

言行一致は紳士道の最も重要な条件である。かくて言う所必ず之を行うというのは、それが常識を以て約束するものならざるべからず、而して、実践躬行の道徳はここに基くことである。実行なきところに常識なく、之を語るも無責任なる一時の出放題たるを免れざるべし。自ら之を己に施して宣しきを得べきは勿論、他人の為に計りては有益なる忠言助手となり、終に其の成功を祭壇に供えて、国家社会の奉仕することが出来るというのは、真個の常識の結実で、価値ある判断のもたらしたものであろう、『菜根譚』の中にも「人を利するは己を利するの根基なり」と言っている。利益権力の壟断を考えるが如きは、常識の最下のものであろう。

米山梅吉の抱いていた哲学と処世訓を、そのまま実践理念とするロータリーに、わが意を得たものとして、すぐさま同調できたことは容易に想像されるどころです。

2. 米山梅吉が目指したロータリー

米山梅吉は大正9年(1920年)8月、18名を東京銀行ク

ラブの晩餐に招待し、ロータリー・クラブについて説明し、9月1日には発起人会を開いて準備し、10月20日に24名で創立総会を開き、ここに東京ロータリー・クラブが誕生しました。翌1921年4月1日付で登録番号855をもってロータリー・クラブ国際連合会から認証されたのでした。

クラブメンバーは米山梅吉の友人が中心でしたから、勢い当時のそれぞれの業種の指導的立場の人たちでした。会員資格の一つとして英語を自由に読み書き話すといったことが採りあげられていたようです。したがって、全員すべてがエリートだった訳です。ただ、エリートばかりを集めようとした訳ではありませんでした。ハリスが素朴な友情を求めあったロータリーの誕生の時とは違い、質の良い会員による質の良いクラブを創ろうという考えであったと思われます。アメリカと日本の社会状況や構造が違っていたため、自然に日本的なタイプのロータリー・クラブが出来たのです。しかし、シカゴクラブの会員も東京クラブの会員も、世の中を良くしようという夢を精神的基盤として抱いていた点では共通なものがあつたのです。

とは言え、初期の東京クラブの活動は極めて低調で、毎月1回第2水曜日に開かれる例会の出席率も悪く、例会が流れることもあり、国際大会に代表を送るでもなく、

奉仕活動もろくに行なっていなかったようです。米山梅吉一人のみロータリーの存在意義を例会で繰返し唱えましたが、会員はそれに乗ってこなかったようです。

ある例会のとき会長として次週の例会は祝祭日に当るので休会すると米山梅吉が通告したところ、出席会員から喜びの拍手が湧いたのを見て、いきなり強い語調で会員の方々をたしなめた、ということもあったようです。

閑話休題、現在と金の価値のまるで異なる当時（大正9年頃）ですが、東京クラブ創立時の年会費は60円、入会金は20円でした。

東京クラブの態度を一変させたのは、大正12年（1923年）9月1日の関東大震災に際しての、国際ロータリーの迅速な対応と、米国、英国を始めとする世界各国の503に及ぶクラブからの手厚い救援活動を目のあたりに見たことでした。東京ロータリー・クラブの会員は、ロータリー運動の何たるかを始めて知らされたのです。

この時以後、東京ロータリー・クラブの例会は毎水曜日に開かれるようになり、ロータリーについても勉強もし、諸々の奉仕活動の実践をするようになったのです。そして、早く欧米のロータリー国と肩を並べるようにしようとの意欲のひとつとして、1925年5月から「東京クラブ週報」が北島 亘の手で発行され、世界各地のクラブに郵送されたのです。そのユーモアと軽妙な筆による

内容は、「東京ブレティン」として好評を博したとのこと
です。

米山梅吉が規則に非常に厳しかった例として、クラブ
の一業種一会員という会員構成を強調され、東京クラブ
では永いこと弁護士は一人であったことなど、その典型
と申すことができます。

米山梅吉はロータリー運動に参加して10数年たった昭
和11年(1936年)3月に、ポール・ハリスの著書“*This Ro-
tarian Age*”の翻訳を完成します。日本語訳の題名を「ロ
ータリーの理想と友愛」とし、その緒言で国際ロータリ
ー運動を精神的国際運動と位置づけ、次のように内容を
解説しています。

ロータリー運動とは、単なる社交機関たぐいの類ではなく、
おのおのその祖国に忠良な国民であって、種々職業を異
にした実業人が広く友愛の主義によって結合し、まずそ
の道徳水準を高めて自己の利益を第一とする態度を改め、
もっぱら国家社会の福利に貢献するところがあるように
奉仕の精神を基調として会同し、政治宗教の外に立ち国
際たぐいの親善、やがては世界平和をこいねがうものである。

一方、ポール・ハリスはこの書物の中で「ロータリー
を勧める人びとは概ね自ら進んでその使命に当る信念の
強い篤志家である。すなわち、自ら時と金とを費やし主
義の宣場に奔走したのであって、彼らの中には生活水準

のはなはだ高い人が多くある。試みに今日までロータリー運動のために犠牲的に尽力された世界篤志の人びとのうち殊にその名の顕著な人を挙げれば、云々」と述べ、日本の米山梅吉はドイツの前総理大臣ウイルヘル・クノー博士ら6名の中に名が挙げられているのです。

米山梅吉が目指したロータリーは、正にポール・ハリスの提唱したロータリーの心を誤りなく日本のロータリーの内で継承し、発展させようと考えておられたと申せます。

既に大正3年に米山梅吉は『新^屋隠密論』のなかで「功成し遂げし者は社会に寄与すべし」と述べておりますが、これをロータリーを通じて実践したのです。

また、三井信託社長時代には、屢々社員全員を社長室前に集めて訓話をされたが、その時には必ず“He Profits Most Who Serves Best”あるいは「人のために一生懸命つくせ」「自分を愛するより人を愛せよ」という言葉を使われたそうです。職業奉仕も忠実に実践しておられたのです。

少し前の年の話に戻りますが、米山梅吉は大正12年に団 琢磨を団長とする経済使節団の一員として渡米しています。この時日本のガバナーとして米山梅吉は、一日ニューヨークロータリー・クラブを訪問します。予め連絡して訪ねましたところ、アメリカ人のこと機嫌良く迎

えてくれましたが、どれもこれもワイシャツ1枚で腕まくりし葉巻をくわえている。米山梅吉が「あなたは何をしておられるか」と聞かれると「俺は石屋だ」、「俺は大工だ」という連中で、腕まくりをしていたのは、今迄別室でビリヤードを楽しんでいたためとわかりました。ロータリーは職業の貴賤を問いませんが、米山梅吉は東京ロータリー・クラブを創立した時、日本財界の一流人物を集められただけに、ニューヨークロータリー・クラブには、少なくとも有名会社の重役ぐらいいはいるだろうと考えていたのではないかと思います。この訪問は少なからず米山梅吉を失望させたようで、この後のアメリカ滞在中は一度もロータリー・クラブの例会に出席しようとはされなかったようです。

米山梅吉はロータリアンとしての誇りとともに、いわゆるNo blesse Oblige—身分の高い者は当然行動も立派であるべきだ、との姿勢を日頃から持っておられ、公共への厳しい責任を自覚し、自ら率先して奉仕し、それにより人びとに奉仕の心を知ってもらい、これを夢みておられたのではないかと思います。

米山梅吉の考えていたロータリ・クラブは、1915～16年度国際ロータリー会長アレン・アルバート博士の「実力を涵養し、かつ境地を高めることこそ、ロータリーの真の目的であり、真の意味である」との言葉に示されて

いると思えます。つまり、ロータリー・クラブの活動は例会を中心に会員の精神的境地が交換されるという点に、その基本的特徴を持つものであり、奉仕の実践の前に「奉仕の心」を作るのがロータリー・クラブのクラブ奉仕なのだと考えられたのです。それ故に、米山梅吉は「例会は人生の道場である」と強調したのです。

米山梅吉がもう一つ目ざしたものは、ロータリーの「国際性」でした。日本の国内事情のため、ロータリーの国際性が軍部に注目され、圧迫が烈しくなり、ロータリアンが非国民呼ばわりされるに及んで、日本国内のロータリー・クラブは解散せざるをえなくなりました。

21年間の歴史を刻んだ東京ロータリー・クラブの最後の例会は、1941年9月11日午後1時45分閉会のベルが鳴り幕を閉じたのです。

米山梅吉の解散の辞は、次のようなものでした。

重い足を引きずって、私はここに立つ（中略）時の流れは余りに急激であった。進路は三つしかない。最後までロータリー・クラブを守り通すか、潔く全く解体してしまうか、国家単位の新しい会を組織し、ロータリーの精神を継承するか、であるが、インターナショナルの精神は新組織の会においても絶対にこれを残すべきであると信ずる。サービスの理想、己の職分を通じての奉仕、世界的和衷、友誼、これらを失うならば新組織の会は存

立の意味をなさない…。

正に米山梅吉の目指したロータリーのビジョンが、この解散の辞の中に凝結されているように思います。これはまた、21世紀を迎えようとしている今日、米山梅吉によって創設された日本のロータリー・クラブを引き継ぐ私たちロータリアンの基本理念として、追い求めて行かなければならない課題なのであります。

3. 現代ロータリーの追い続けているもの

ロータリーはいかなる方法でロータリーならではの「奉仕の心」を表現すればよいのでしょうか。

米山梅吉が明確に示しているように、ロータリーの最大の特徴はインターナショナルであるという点にあると思います。

ロータリーは創設初期の頃から、コミュニティへのサービスを強調してきました。コミュニティとは自分が生活している場所であります。職業を通じての奉仕が、そのままコミュニティへの奉仕であり、そのような人びとの集いが生活を守り、職業の意義を発展させ、地域を形成するための集いになる。これがロータリーが初めに夢みたことでした。

以来ロータリアンたちは、奉仕の経験を重ねるに及ん

で、「奉仕の精神のもとに結集した実業家と専門職の人の友情を通じて、相互理解、国際親善、世界平和を促進する」という目標を加えたのでした。国際奉仕という新たなロータリーの夢が誕生したのです。ここでロータリーは、ロータリアン個々人の奉仕活動を重視するとともに、団体としての奉仕活動をも行う「社交団体」となり、奉仕の心の表現活動の方法をも拡大したのでした。これは1922年のことです。翌1923年ロータリーの国境を越えての奉仕活動の対象となったのが日本であったことを、私たちは忘れてはなりません。

ロータリーが最初に夢み重視してきたのは、私たちの日常的に関係の深い生活圏（コミュニティ）を対象とした奉仕活動でしたが、コミュニティが世界規模に広がってきた現代においては、国際奉仕として、ロータリアンの夢を更に膨らませることになってきたのです。

言語、風俗、文化、宗教が違っていても、人間の心の中には善意が存在しているということ、また、限られた地球上に、多種多様の要因があるにもかかわらず、お互いに何らかの因縁によって結びつけられているという認識を、ロータリアンたちは、国際奉仕の実践のなかで悟ってきたのです。

ラハリー国際ロータリー会長(1961～62年)が言われたように「世界が狭くなりつつある今日、地球上のどこか

に不幸な人がいる限り、われわれは幸せにはなれない」のです。「勤勉と正直には幸福の報酬があり、怠惰と不正直には貧困と不幸の報いがある」とする自己中心的な考え方だけでは、全人類の幸福は実現できないのだとするロータリアンの自覚が生まれてきたのです。

私たちロータリアンは勿論一般の人びとも、ロータリー財団のプロジェクト、米山奨学金制度、世界社会奉仕などに参加した結果得た感動から、そのことを知ったのです。

本年度グレン・キンロス国際ロータリー会長が、「ロータリーの心を—あなたの住むところ、私たちの世界、そこに住む全ての人びとに」と提唱された意義はここにあるのです。また、来るべき年度、ジェームス・レイシー国際ロータリー会長が、「ロータリーの夢を追い続けよう」と提唱され、このテーマを奉仕活動に具現することを望まれている理由がここにあるのです。

4. 夢を実現した農業技術者の話

ロータリアンではないのですが、青春時代から描いていた夢を、一生かけて実現した農業技術を、私は最近知りました。

本年2月河北新報社（東北の地方新聞社）は、21世紀

を支える食糧としてのコメの価値と、コメをつくることの意義を地球的規模で問い直すために、24か国を取材し、その記録を本年2月に1冊の書物として発表しました。「オリザの環」がそれです。オリザとは稲の学名です。

この書物の中にヒマラヤ山中の王国のブータンの西部パロの農場についての記録があります。以下にその記録の要旨をご紹介します。

パロと呼ぶ標高2300メートルにある広大な溪谷の町を訪れたのは6月下旬、丁度日曜日で、白壁と極彩色の飾り窓とのコントラストが美しい家々に囲まれた広場で市いちがたっていた。行き交う男女の民族衣装は日本の着物とよく似ている。盛んに買い求める野菜を見て、また日本を見る思いがした。ニンジン、ダイコン、ピーマン、ナス、トマト、ネギ、サヤエンドウ……ヒマラヤの野菜といえ、トウガラシとジャガイモぐらいしかない筈なのに、この疑問に日曜市の農民が答えてくれた。

「こんなに沢山の野菜を作ったり、家で食べられるようになったのは、ほんの2、30年前からだ。「ニシオカ」が日本から種を持ってきてくれた」「市のほかに、野菜を南の国境の町に運んで、インドの商人に売ったりもしている。彼のおかげだ」

「ニシオカ」とは西岡京治（大阪府八尾市出身）のこと。彼は海外技術協力事業団から農業専門家としてパロ

に派遣された。1964年31歳の時だった。大阪府立大で育種と野菜園芸を学んだ西岡は無類の山好き。ヒマラヤの山岳農業を調査するなど豊富なフィールドワークの経験が買われた。任期は2年だった。赴任した当初パロ谷は、10アール当りの収量が120キロほどの赤米しか作れず、毎年のように深刻な冷害に悩まされていた。コメは祭りの時しか食べられず、麦、ソバにトウガラシの粗食で肉体を酷使した農民の多くは40歳代で死に、子供の早世も目立った。

そんな姿を目にした西岡は「農民たちに何とかコメを十分食べさせたい」と、前例のない「極限の地」でのコメ増産の夢に挑戦した。ブータンの言葉を覚え、民族服を着て農民と土にまみれた。

ブータン政府の強い要望で、彼の滞在は長期化した。

何年もかけて日本から21品種もの稲を持ち込み、少しでも冷害に強く、収量も多いコメをと、つかれたように試験栽培を重ねた。そしてパロ谷に一番なじむ「No. 11」、当時岩手県の奨励品種だった「たかね錦」を探り当てた。

ブータン政府の協力で、西岡が1966年につくったボンディ農場が町外れにあった。西岡の活動拠点だった5.2ヘクタールの農場は、緑濃い照葉樹林の山々と、のどかな水田に囲まれていた。十数棟立ち並ぶガラス温室やビニールハウスをのぞくと、ブロッコリー、トキワダイコ

ン、西洋ネギ、懐かしい畑の匂い、わきにはモダンな事務棟や倉庫が並び、日本製のトラクターや農業機械も沢山ある。丘陵地の果樹園には、アプリコットやモモにまじって、日本産のリンゴ「ふじ」の木まであった。10年前からここで栽培技術を学んだ4軒の農家がゴールデンデリシャスを育てている。毎年10トン近くリンゴがとれていい値で売れ、村の暮らしを助けている。

標高2,600メートル、パロ谷一の冷害常襲地帯の村でも、西岡はリンゴ畑以上に大きな足跡を田圃に残している。

ボンディ農場を見下ろすパロの丘に、「ブータン種子会社」がある。西岡とブータン政府はこの国の風土に合う作物を先端技術で生み出そうと、日本から最新式の機械も導入して造った種苗生産機関である。今の若き支配人キンレイ・ドルジ(34)は、千葉大に留学しバイオテクノロジーを学んだ。「日本語をおぼえたのも、日本に留学したのもすべて西岡さんの生き方に共感したから、国連はじめ多くの国や機関が、お金や開発事業の援助をしてくれるが、一人の人間として、農民と交わったのは彼だけだった」と語った。

ブータンのコメ作りの名人は、パロ谷のバチュ川のほとりシャリ集落に住む71歳のリンチェン10アール当り玄米で720キロ(12俵)を穫る、東北のコメどころでもこれだけ穫る人はそういない。標高2,300メートルの高地だか

らすごい、驚異の技術は西岡の長年の指導の賜物だという。

パロ谷に赤米しかなかった昔、農民は少しでも収量を上げたい。冷害が来れば村は飢えるという強迫観念から、乱れ植えに近い密植で苗を育てた。そんな時代、西岡は農場で疎植を実演してみせた。30センチ×20センチの間隔で1株に2,3本ずつ苗を植え、「少なく植えれば、コメは多くとれる」と力説した。「妙なことを言う外国人が来た」と、初めは皆な煙たがるばかりで、取り合わなかったそうだ。だが、若い頃から研究熱心なリンチェンは西岡の指導通り実施した。効果は劇的だった。収量は5倍も増した。西岡方式に従ったシャリ集落の稲はいもち病にも殆んどかからず豊かに実った。

西岡はパロに28年間とどまり農業指導に当り、1992年3月59歳で死去している。現地で苦楽をともにした妻里子さんは言う、「種は時をかけて実を結ぶ、農業の支援が2年で出来るはずはなく、2年で帰るつもりはない。夫は行く前からそう言っていました」

ブータンのワンチュク国王は1980年西岡に、「国の恩人」として最高の栄誉称号「ダショー」を贈り、国葬で死を悼んだ。

「魂は不滅」というブータンの人びとに墓はない。パロで火葬にした遺骨を、バチュ川の急流に流す、パロ谷

で28年間も農民に尽くした西岡京治の遺骨も、同じように川に流され、ヒマラヤの大自然にかえった。

リンチェンとその息子ペンパは、毎日チベット仏教独特の極彩色の仏間に朝と夜の2回籠り、欠かさず3時間祈りを捧げている。仏と先祖、そして「ニシオカ」に。

1994～1995年度ガバナー
1998年5月24日 地区協議会
於：聖光学院